

記憶の文脈依存性と新近性効果

Interactive Relationship between Environmental Context and Recency Effect in Free Recall

漁田俊子

ISARIDA, Toshiko

新近性効果の大きさは、[提示間隔]／[保持間隔]に比例するという（比の法則 *ratio rule*）。これに対して漁田・漁田（1993）は、比の法則からは新近性効果が成立不可能と予測される条件下（提示間隔 30 秒，保持期間 24 時間）でも，場所・実験者・共存課題を複合させることで，符号化時の文脈を十分に復元すれば，新近性効果が生じることを見いだした。本研究は，新近性効果が成立不可能条件下で（提示間隔 30 秒，保持期間 8 分），場所・共存課題・BGM による複合的文脈操作を用いて，漁田・漁田（1993）を追試した。

方 法

実験計画 文脈条件（同文脈 SC vs 異文脈 DC，被験者間）×系列位置（被験者内）の 2 要因混合計画を用いた。

被験者 静岡県立大学短期大学部生 63 名を，ランダムに SC 条件と DC 条件に割り当てた。その結果，分析対象者は，SC 群 37 名，DC 群 36 名となった。

材料 心象価と具体性がいずれも 5.00 以上の漢字 2 文字熟語（小川・稲村，1974）14 個を相互に無関連となるように選出し記銘リストとした。さらに，14 個の項目をランダムに 7 対に割り当てた。

環境的文脈 場所，共存課題，BGM を複合させて操作した。SC 条件では，符号化時と同じ場所，BGM のもとで，符号化時と同じ課題遂行後に自由再生を行わせた。DC 条件では，符号化時とは異なる場所で自由再生を行わせた。その際，BGM は流さず，符号化時の課題も遂行させなかった。

場所要因としては，3 種類の場所（A，B，C）を使用した。SC 群条件の半数は場所 A で符号化とテストを実施し，残りは場所 B で実施した。DC 条件の半数は，場所 A で符号化，場所 B でテストを実施し，残りは場所 B で符号化，場所 A でテストを実施した。いずれの条件でも，符号化とテストの間の干渉課題は場所 C で実施した。

場所 A は，部屋の片隅にカーテンスタンドで作った 2m×2m のスペースとし，テーブルと椅子および刺激提示用の 17 インチ CRT ディスプレイを配置した。場所 A では，実験者は着席した被験者の背後から教示し，課題遂行中はカーテンスタンドの陰に隠れた。場所 B は 5.5m×5.2m のプレイルームとした。場所 B では，1.8m×0.9m のテーブルを挟んで，被験者と実験者が対面する形で着席した。被験者の正面には窓があり，外の景色（並木，町並みなど）が見えた。その他，幼児・児童用の遊具・玩具が散乱していた。場所 C は 4.1m×5.2m の部屋で，被験者からは戸棚が見えるだけであった。場所 A，B，C は同一研究棟の同一階にあり，1 分以内で相互移動が可能であった。

BGM は，テンポの速い曲として，トリストエーザ（ボサノバのギター独奏曲）と子象の行進（サウンドトラック），テンポの遅い曲として，ムーランルージュ（サウンドトラック）

とヘッドライト（サウンドトラック）を用意した。各被験者ごとに、ランダムに選曲し、エンドレスで流した。

共存課題Aとして計算課題を行わせた。計算課題では、1桁数字の3項の加減算をCRTディスプレイに提示し、答の下一桁に相当する数字キーを押させた。正答には「ピッ」、誤答には「ブー」というフィードバックを与えた。

手続き 被験者は個別に実験参加した。符号化の手続は全被験者共通とした。各被験者には、30秒間共存課題を行ってから連想課題を行う、という作業を7回反復させ、最後にもう1度30秒間の共存課題を行わせた。連想課題では、項目対に共通な連想語を反応させた。項目対は視覚的に8秒間提示し、提示終了後、直ちに連想反応を口頭で報告させた。

符号化が終わると、被験者を場所Cに移動させ、干渉課題として単語完成課題（藤田，1997）を遂行させた。場所間の移動と単語完成課題の教示の時間を含めて、符号化とテストの間が8分間になるように調整した。

符号化の8分後に、各条件に対応する文脈条件の下で、口頭自由再生を実施した。自由再生テスト終了後、第1日の実験に関する内省報告アンケートを実施した。

結果と考察

文脈条件ごとの再生率を系列位置の関数として Fig. 1 に示す。新近性効果が関係している系列位置5-7について、文脈×系列位置の分散分析を行ったところ、文脈の主効果が有意で $[F(1, 71) = 7.54, p < .01]$ 、系列位置の主効果が有意傾向にあった $[F(2, 142) = 3.02, .05 < p < .10]$ 。そして両者の交互作用は有意であった $[F(2, 142) = 3.48, p < .05]$ 。

本研究も、漁田・漁田（1993）と同様、新近性効果が成立不可能と予測される条件下でも、十分な文脈復元操作を行えば新近性効果が生じるという結果を見いだした。比の法則は、文脈の視点を加えて再検討することが必要である。

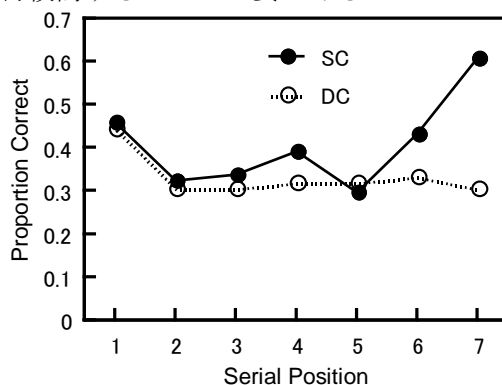


Fig.1 Proportion of items recalled as a function of context and serial position.